

## オラン・アスリ社会における部族アイデンティティ ： 永田脩一「西セマン族Kensiu の人口と部族アイ デンティティ」 (JAMS 研究会例会・東京都立大学 社会人類学研究会 合同研究会)

著者	信田 敏宏
雑誌名	日本マレーシア研究会会報
巻	21
ページ	6-7
発行年	2001-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00005835">http://hdl.handle.net/10502/00005835</a>

## オラン・アスリ社会における部族アイデンティティ

——永田脩一「西セマン族 Kensiou の人口と部族アイデンティティ」——

(JAMS 研究会例会・東京都立大学社会人類学研究会 合同研究会)

信田敏宏 (東京都立大学)

永田脩一先生は、アメリカ先住民研究で著名な社会人類学者です。カナダのトロント大学在任中に、Universiti Sains Malaysia (USM)で教鞭を執られ、長年の希望であった東南アジア研究を開始しました。とりわけ永田先生が興味を持たれたのは、マレーシアの先住民オラン・アスリ(Orang Asli)の研究でした。USM 在任中には、USM の学生たちと共に調査隊を組織して、積極的に調査を展開していました。その後も継続してオラン・アスリ (とりわけネグリト系のグループ) の調査を実施しています。昨年もオラン・アスリの調査を行ってきたとおっしゃっておられました。そのフィールドに対する熱情たるや、永田先生が骨の髄までフィールドワーカーであることは誰もが認めることでしょう。

その精力的な調査成果の一部は、数々の論文のなかにちりばめられています。その多くは英語で書かれ、なかにはマレーシア語で書かれた論文もあります。日本語での論文がほとんどないために、永田先生をご存じない方もいらっしゃるかもしれませんが、特に東南アジアを対象とする社会・文化人類学者の間ではかなり有名な、そして「伝說的」な存在として知られています。

今回、偶然にも永田先生をお招きすることができたのは、現在、南山大学教授である原

不二夫先生が、私(信田)の1998年のJAMS総会での研究報告を聞き、永田先生をご紹介してくださったからです(永田先生は原先生の恩師とのこと)。その後、永田先生が東京福祉大学にて半期の間教鞭を執られることになり、何度かお会いして情報交換(といっても、私が教えてもらうことの方が多かったのですが)を行うことができたのです。そして、今回の研究会の実現が可能になった次第でした。

以下では、2001年6月30日(土)に東京都立大学の国際交流会館で行われたJAMS研究会例会と東京都立大学社会人類学研究会の合同研究会での永田先生のご報告「西セマン族 Kensiou の人口と部族アイデンティティ」の要旨を私なりに簡単に報告いたします。

\*\*\*

ケンスィウ(Kensiou)という西セマン(ネグリト系)のグループの「人口と部族アイデンティティ」を扱った今回の報告の目的は、「人口の激減」かあるいは「民族性の消滅」かということについての考察を行うことである。今回のテーマは、民族大虐殺、民族浄化といった暴力的な「民族の消滅」の動き、人口の激減による「民族の消滅」、通婚によってマジョリティ民族に同化されていく「民族の消滅」の問題など、世界大のレベルで起こっている現象に引きつけて理解されるべきである。

まず、ケンスィウの概観が説明される。とりわけ、「自己(meni)」と「他者(hemi)」の対比でみずからのアイデンティティを語る傾向があること、アイデンティティの中核には様々な宗教的信仰があること、木の上に「墓」をつくっていたこと、厳しい食物規制といった特徴を持つことなどが説明される。現金経済の流入による経済的变化が起こっていること、特に財と呼べるものはないことなどのケンスィウの経済についても簡単に触れる。

報告において最も力を入れた部分は、次の性的関係および婚姻関係の部分であるが、それに関しては、あまり質問が出なかったように記憶する。

性的関係および婚姻関係については、結婚できる／結婚できないという区別が親族関係の上でも厳格に存在している点が強調される。結婚をほとんどの人が行い、離婚も頻繁であるという状況が存在する。主として義理の関係にある異性に適用される *ceman* という結婚できない相手に対する規則が存在する。一方、結婚できる相手は *meni lue* と呼ばれ、自分たちと同じ「人々」であるが集落の外に住む人と規定される。こうした厳格な性規則・婚姻規則（この場合、結婚できないということは性関係も禁止されるということ）によって、結婚相手は極めて限定された状況にある。その結果、未婚の男性が増加していると報告された。

こうした厳格な性規則・婚姻規則と、過小な人口(集落の人口は 185 人)という状況は、まさにパラドックスを引き起こす。なぜなら、

自分たちの人口を維持するためには（そうしないと極少民族は消滅する）婚姻・出産という人間の再生産によって人口を維持しなければならないのに、婚姻の相手は極めて限定された相手から選ばなければならないという状況があるからである。

そこで外部の者との通婚という選択が出てくるのだが、その場合、マレー人との通婚ではイスラーム改宗という障壁があり、なかなか実現しない。そこでケンスィウという「部族」レベルを越えた通婚関係が増加する。そうした状況のなかでケンスィウという「部族」のアイデンティティは維持されるのかどうかということが婚姻関係（人間の再生産）と人口維持をめぐる永田先生が強調したいことだったと私は思う。

結論としては、ケンスィウという部族のアイデンティティは消え去る傾向にあり、より上位の「オラン・アスリ」（マレー系の場合の「マレー人」に対応する民族範疇）という新たなアイデンティティに吸収されていく傾向があることが指摘された。

報告の後の質問と議論においては、「オラン・アスリ」というカテゴリーやそれと「ケンスィウ」というカテゴリーの関係、マレー人との通婚の少ない理由としてイスラーム改宗問題、オラン・アスリをめぐる政治（サバの先住民の動きとの関連）、混血（オラン・アスリ同士、華人やマレー人と間の混血児の扱いをめぐる）、オラン・アスリのイスラーム化の実態などをめぐって熱心な議論が展開された。